

## 第4日目 (6月5日): 東京

訪問団が4日目に訪れたのは、東京消防庁が運営している池袋防災館でした。インタラクティブな学びの場として同施設は地震、火災、煙などさまざまな緊急事態を想定した体験ツアーを提供し、防災と救命について知ることができるようになっています。



ツアーでは5つの違う種類の地震を体験することができ、揺れのタイプに従った避難行動が学べます。団員たちは消火器の操作や濃い煙中の避難も体験しました。また、負傷者への救命措置及びマウスツーマウス蘇生法を練習できたのは有意義な経験でした。

## 日本訪問を終えて

韓赤による今回の日本訪問は、人類史上4番目という規模の地震が招いた破壊の爪痕をたどる旅であり、また、日韓の赤十字社が災害に対する備えと対応を強化するために実施している施策と業務システムを互いに学び合う機会でもありました。

こうした研修を重ねることで、異なる地域の赤十字社間で体験・知見を共有する基盤がやがて構築され、ついには地球規模の災害に立ち向かうための、さらに進んだ一貫した包括的対応システムが実現するはずであるという訪問団の信念は、この訪日体験によって強まりました。

訪問を終えた団員たちが旅行中に抱いた個人の考えやアイデアの一部を以下にまとめました。

### **韓国は日本の経験を生かして災害対策に取り組みたい**

- 「日赤で機能している災害対応計画や装備を学べたのは大きな収穫だった。」
- 「日本政府の方と日赤が行ったプレゼンテーションを見て、赤十字と国を結びつけているよく整備された災害対応システムを学ぶことができ役に立ったし、また、日赤が高い信頼を得ている理由も納得できた。」
- 「日赤の原子力災害対応システムは、92カ所の赤十字病院を基礎に成り立っていて、韓赤の状況と全く違うと感じた。従って、放射線災害に対処する我々自身の対応システムを確立するには、別のアプローチを考える必要があると思う。」

### **長い時間と懸命な努力がなされ、不安は残るも復興活動は続く**

- 「日本での原子力災害について自分が抱いていた以前の認識は、インターネット、ラジオ、SNSなどを通じて得られた間接的な情報に基づいていた。しかし、今回の訪問で、もっと客観的観点から事実を見る機会が得られた。また、日赤において救護の現場で活動する人たちと直接交流する時間を持てた。」
- 「この訪問前は、放射線が怖くて福島を訪れることには抵抗があり、不安も感じた。しかし、訪問中ずっと、行く所どこにでも放射線測定器が設置されていたので、安心感を覚え、安全と感じた。」
- 「復興に向けて長い時間と大きな努力を傾けているにもかかわらず、除染作業が完了する目途はた

っていないように見えた。また除染作業で出た放射線廃棄物の処理が課題になっているようだ。」

- 「汚染された地域を移動中、除染作業の見学は車の窓越しにしか許されなかったのであまり情報を集められなかった。しかし訪問者の安全に配慮しての対策なので、それも十分理解できた。」

**災害からの復興を目指す日赤のさまざまな努力は、被災者に大きな励ましとなり、元気を与えている**

- 「災害復興事業を含め、日赤が行っている多岐にわたる活動は、日本の人々に大きな癒しを与えている」

- 「今回の訪問で、韓赤のホープシェアリング・ボランティアセンターで特別プロジェクトとして採用できる活動のヒントが得られた。」

- 「韓国における現在の救護活動は、救援物資の配布に著しく偏っている。我々は、支援グループと地方自治体の認識を変える必要がある。」

- 「訪問団を受け入れて下さった日赤に感謝する。災害に立ち向かい、多くの問題に対処するためには、今回の訪問が両組織間における強い連帯感の育成に資すると思う。個人的な面では、この体験は自分の能力を向上させ、幅を広げるために役立つと思う。」